

第4回研究会

I - 3 リバーミード行動記憶テスト (RBMT/日本語版) による
日常記憶の評価——記憶障害の評価とその治療戦略——○原 寛美¹⁾ 綿森 淑子²⁾

【はじめに】 諸種の認知機能検査においては、生態学的妥当性が求められている。記憶の検査法においても同様であり、従来の机上の記憶検査バッテリーでは、記憶障害患者の日常生活上の行動学的特性を説明することは不可能であった。1985年に Barbara Wilson により開発され標準化されたリバーミード行動記憶テスト (以下, RBMT) は日常生活場面のシミュレーションを用いた検査法であり、日常記憶 (everyday memory) の重症度を的確に評価できるとされている。我々は1989年に Wilson の許諾を得て RBMT の原著を元に日本語版を作成し、記憶障害患者に適用してきた。RBMT 日本語版による記憶障害の評価の特性について分析・検討した。

【対象】 記憶障害を主症状とする頭部外傷7例、破裂脳動脈瘤術後例7例、計14例。年齢は16歳から70歳、平均年齢 39.5 ± 19.6 歳。急性期からの観察例が8例、慢性期における観察例が6例であった。1例において語義失語の合併が疑われたが、他の症例では失語の合併はなかった。

【方法】 対象例に対して最低2ヶ月以上の間隔をあけて、RBMT を実施。また適宜、三宅式関係対語などの従来の記憶検査ならびに WAIS-R を実施した。さらに患者の日常行動の評価を17項目 (例: スタッフの名前を記憶している、訓練時間を記憶している、通院を一人でしている、内服薬の管理ができています、など) にわたり、自然観察法あるいは質問法により、その達成、未達成

を随時評価して RBMT (標準プロフィール点フルスコア 24 点) との対比をおこなった。

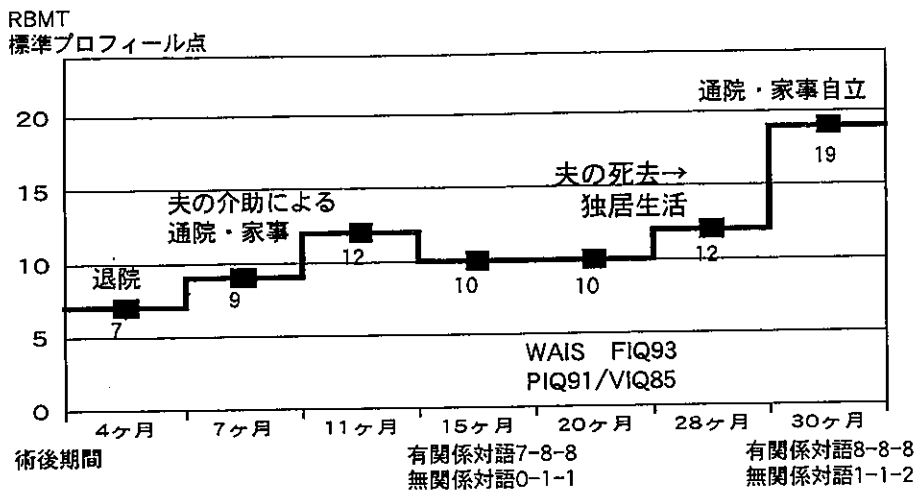
【結果】 RBMT 標準プロフィール点と17項目の行動評価達成数との関係では、決定係数は 0.921 であり、高い相関が認められた。RBMT 標準プロフィール点が患者の日常生活上の行動を鋭敏に反映していることが示された。達成された行動評価別に RBMT 標準プロフィール点の平均点を検討すると、7 点以上であれば 90% の場合に病室やトイレを迷うことがなくなり、10 点以上であれば訓練時間の記憶が 90% の場合に達成されていた。一人で通院が可能となるのは 15 点以上であり、計画的な買い物が可能となるのは 17 点以上の場合であった。同時期に実施しえた三宅式有関係対語と RBMT との関係では $R^2 = 0.716$ と高い相関が窺われた。しかし無関係対語との関係は $R^2 = 0.112$ と相関は認めなかった。RBMT を用いた個々の症例の経過観察においては、症例ごとの改善やプラトーとなる経過が把握でき、その時々記憶訓練の効果判定が可能であった。また環境設定が日常記憶に与える影響についても把握できた。

図は、両側 IC-PC 脳動脈瘤術後に記憶障害を生じた症例 (64 歳, 女性) の経過を示す。術後 20 ヶ月まで RBMT は 10 点前後で推移し、メモリーノートやカレンダーの活用などの訓練を受けていたものの、家事や買い物、通院などは全て夫の指示を必要としていた。標準プロフィール点は変化なく、日常記憶の改善はこのままプラトーかと思なされたが、夫が突然他界し独居生活を余儀なくされてから、RBMT 標準プロフィール点は 12 点から 19 点へ改善していた。改善した RBMT

1) 相澤病院リハビリテーション科

2) 広島県立保健福祉短期大学言語聴覚療法学科

図 64歳, 女性, 両側IC-PC脳動脈瘤術後例におけるRBMTの推移



のプロフィールは、散文の再生と道順の再生などの項目であった。関係対語の成績は前後で変化しておらず、RBMTのスコアの変化は、日常記憶の改善を反映しているものと考えられた。一定のレベルに到達している記憶障害例では、日常生活上の依存度を少なくする環境設定が、日常記憶そのものの改善につながる可能性が示唆された。

【まとめ】 RBMT日本語版を用いて、記憶障

害患者の行動学的特性の評価をおこなった。RBMT標準プロフィール点のスコアの経時的推移は、患者の日常行動全般の変化とよく一致していた。RBMTによる患者の評価は、記憶障害の重症度の判定に有用であるのみならず、記憶障害患者に対する治療戦略を立てていく上でも有用であると考えられる。従来の机上の記憶検査法では評価できない行動学的な評価・予測が、RBMTを用いることにより可能となると推定される。